

# 辻先生のビザンティン美術調査に関する写真について

早稲田大学文学学術院招聘研究員

担当地域：アルジェリア、ウクライナ、ギリシア、トルコ、ロシア

武田 一文

辻佐保子先生の論集に『ビザンティン美術の表象世界』と題するものがある。ビザンティンとは東ローマとも呼ばれる、かつて東地中海・バルカン半島を中心として栄えた帝国である。辻先生は、この旧ビザンティン圏、そして帝国の文化的基盤であった正教会の美術を遺す地域を精力的に調査されていた。調査対象は主に10世紀～14世紀の教会建築、教会内部の壁画であった。またロシアでは下って15世紀ごろまでの教会建築とイコン（礼拝用の板絵）を調査している。併せて、現地の美術館では古代ギリシア・ローマから中世までの様々な美術品を詳細に撮影されている。その中で、本稿では特にトルコ・カッパドキアの調査について記したい。

キノコ型の奇岩、それを眼下にした気球ツアーなどを名物に、多くの観光客を集める地カッパドキアであるが、古くは4世紀に「カッパドキア3教父」と呼ばれる重要な聖職者を輩出するなど、キリスト教の歴史においても重要な土地であることは日本でもあまり知られていない。同地には、しばしば誤って「異教徒の目から逃れるため」岩壁やキノコ岩に掘り込まれたと伝えられる、岩窟教会が無数に存在する。実際には暑寒いずれも厳しい気候に対応するための合理的な選択だったものだが、これらはビザンティン帝国が当地を支配した11世紀頃まで、小規模な教会の奉獻が盛んであった時代に制作されたものが多い。3教父への追慕か、中世壁画の霊性を求めてか同じ正教を信仰するロシアからの観光客も多いようであるが、殆どの教会はカッパドキア各地に点在し、一部の博物館化したもの以外を訪問するには、時に家畜の闊歩する道路に車を走らせ、そしてトレッキングする必要がある。現代でこそ情報が増えたものの、辻先生の調査時には、恐らく仏、独の研究者による文字による位置記述を頼りに、キノコ岩の間を教会を探しながら歩くことも必要だったと思われる。

正教会の通例に従い、カッパドキアの教会も内壁一面にフレスコ壁画を描く。とは言えこれらが写真資料付きで報告されることは少なく、研究を深める上で現地の訪問は不可欠と言ってよい。辻先生は後にカッパドキアの壁画を主題とした論考を複数著されており、調査による実見と撮影画像が研究に大きな意味を持ったことは疑いない。一方、先生が遺されたカッパドキアの数十に及ぶ教会の写真資料は、ビザンティン美術史上においても意義深いものである。それはカッパドキアの教会が置かれた特殊な事情と関係する。カッパドキアは1071年以降トルコ系民族の支配するところとなり、「教会」も多くは顧みられなくなった。現在、教会として利用されるものはなく、一部は博物館として管理されるが、残る多くは適切な保護がなされていない。そのため経年劣化、落書きなどの人為的破損により壁画の状態は年々悪化している。従って、数十年前のカラー写真により、壁画の状態が記録されていることはかつての状態や劣化の進行状況といった知見として重要である。一例として、ソーアナル地区ユラルル教会天井部分（図1、13世紀か）を挙げる。天上の楽園に憩うアブラハム・イサク・ヤコブが描かれるが、2014年筆者撮影の画像（図2）と比較すると、右端のヤコブの剥落が進行し下半身がほぼ失われたこと、手の届きやすい低い部分に数字を中心とした落書きがかなり増えていることが分かる。一方、保護のため現在はモルタルで外壁および崩落した開口部を塗り固めたエル・



図1 ソーアナル地区ユラルル教会天井部分



図2 天上の楽園に憩うアブラハム・イサク・ヤコブ

ナザール教会（10世紀）の、かつての姿を見ることができるとも興味深い（図3）。しかしこれらの教会は、岩壁に穴を掘り込んで制作されたため開口部に乏しく、内部は非常に暗い。先生が撮影された写真も、被写体が何かを判別することが困難な状態であるものが散見された。本プロジェクトにおける筆者の作業はこれらの同定が大きなウェイトを占めたが、改めて各教会の内部構造や画像配置を熟考することとなり、筆者にとっても意義深いものであった。

カッパドキアだけでなく、東欧やロシアの教会は、現代でも西欧の教会に比べアクセスが整っているとは言い難い。小さな堂宇であれば地域の信徒以外の訪問は稀である。辻先生の調査メモでは、ある教会で「中でメモを取ることも許可されなかった」と嘆かれているなど、調査にはひとかたならぬ苦労があったと想像される。しかしその苦労の先に数百、千年を経て遺るフレスコ、煌めくモザイク、燭光に照らされるイコンとの出会いがあるのがビザンティン美術の醍醐味であり、先生の遺された多数の写真を思えば、その感動はまたひとしおであったろうと俚ばれるのである。



図3 エル・ナザール教会

# 辻先生のフィールドワーク：スライドを通じて見えた姿

立教大学非常勤講師

担当地域：イタリア（ローマ、ヴァチカン、ラヴェンナ、ポンペイ）、フランス（アルル）

米倉 立子

今回寄稿させていただくにあたり、担当したスライドを見直してみた。担当した量は全体のほんの一部であるが、それでも合計2200枚超あった。中には文献の図版を撮影したものや購入したスライドも入っていたが、辻先生ご自身の撮影スライドは7割くらいを占めていたのではないだろうか。

私は、主にイタリアの初期キリスト教時代の聖堂やカタコンベ（地下墓所）、石棺、ポンペイ遺跡などを写したスライドを担当したが、どの対象も丁寧に細部まで写っている。特にカタコンベの壁画は、似たようなモチーフや装飾パターンが多数撮影されており、傷みの多い壁画の一部が写っていたりすると、どのカタコンベのどの墓室のどの向きの壁を撮影したものか、同定に非常に苦勞した。「ああ、私も先生と一緒にそのカタコンベの墓室で首をぐるっと回して、写されたモチーフがどこにあるのか、この目で確認したい！」と何度思ったことか。こうやって見ると、細部こそ欠落部がないように自分で撮影しておかねばならないという先生の気持ちが伝わってくる。撮影当時の状況から考えれば、自分が欲しい部位の写真を後から手に入れることは極めて難しく、また外国での調査で二度目の訪問があるかどうか分からないわけで、常に一期一会で撮影できるときに丁寧に記録しておくことが何より大事だったのだろう。

スライド周囲のマウントには、先生の走り書きのメモが記されていることがしばしばあり、それを頼りにヒントが得られることもあった。これだけ膨大なスライドを毎回整理するのはいかに大変なことかと感嘆してしまう。でもメモが少々達筆すぎる場合も多く、「もう少し解説しやすくしていただければ、より助かったのに…」と思うこともあった。まあ、自分のためのメモだから、こんな風に私に読まれたりするとは思っていませんものね。

先生が撮影していた時代より後とはいえ、私もかつて前世紀末から今世紀初め辺りには大きなカメラを背負い、スライドフィルムでの撮影を体験したデジカメ以前を知る世代である。先生の時代に比べれば、何事も相当楽で便利になっていただろうが、その頃でもスライドフィルムはそれなりに高価だったし、感度が低いフィルムだと暗い聖堂内ではきちんと写らず、フラッシュを使っても届く範囲は限られているし、高感度フィルムだと高価になる割に解像度は下がる。しかもどんなフィルムで撮ろうと、狙い通りに写っているかどうかは現像してみなければわからなかった。高価だから無駄には撮れないのだが、数打たないとまるで写っていない恐れもある。そんなわけで、調査中の写真はひたすら調査対象ばかりを写したのになり、後で見返しても資料写真ばかりで、美味しい食事や楽しんでいる自分の姿など、スナップ写真はほとんど残っていない。今どきの「映え」狙いで楽しみな雰囲気やいかに演出し、素敵に残そうかと工夫を凝らす若者からしたら考えられないことだろう。

でもだからこそ整理しているスライドで、フラッシュが届く狭い範囲しか写ってなかったり、全体が暗すぎたりピントが甘かったりするスライドは、資料としては利用価値が低くとも、なんとか写り込んだ情報を読み取ろうという気になった。きっと先生が撮影していた頃は、オート

フォーカスなどなく、毎回ピントを合わせ、フィルムの巻取りも自動ではなかったのではないかと。巻取りに失敗したままうっかり蓋を開けてしまえば、せっかく撮影したフィルムを感光させる恐れもあって、意外と最後まで侮れないのだ。

今や勝手に補正してキレイに写してくれ、その場で写りを確認できて、データの保存も簡単で、後から加工も簡単にできてしまうデジカメやPCが当たり前になり、ネット上で自分で撮影する以上に良く撮れている細部の画像を探し出せると思いがちな現代の私のダレた感覚からしたら、先生はいかに緊張感をもって対象と対峙し、丁寧に撮影していたことだろう。膨大なスライドを見ていく中で、見逃しが無いよう観察して、記録を正確に残し、さらに記憶にもしっかりと刻まねばという使命感に満ちたフィールドワークに従事する先生の姿が立ち上がってきた。こうやって調査現場に身を置いて、その季節や時間の自然光の量、聖堂や墓室の空間の大きさ、スライドには写り込まない音や匂いを感じながら、先生はその図像を創り出した人々、それを見ていた人々の感じ方、考え方に想像を巡らしていたに違いない。「当時の人々がどう感じていたか」を自分の感性に基づく想像だけで語ることは学術書ではできない。だが自身の体験に基づく実感が根幹になれば、時空を超えた他者に近づくのは難しい。先生のしなやかな感性と尽きぬ研究意欲が伝わってくる。こう書きながら院生の頃、自分の意情と不勉強を見抜かれると緊張しながら先生と言葉を交わした気持ちが蘇ってきた。いつでも、いつまでも辻先生は辻先生でいらっしやるのだった。



図1 エクスカーションの合間の休憩中だろうか、他の研究者と共に珍しく写り込んだ辻佐保子先生の姿。撮影したのは辻邦生先生ではないだろうか。

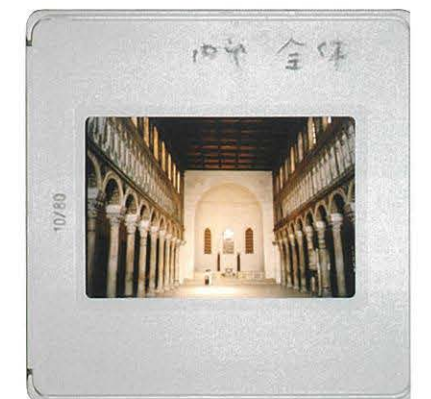


図2 イタリア、ラヴェンナのサンタポリナーレ・ヌオーヴォ聖堂内陣。創建時のアプシスは8世紀の地震で崩壊し、どのような図像が描かれていたのが不明。20世紀には創建当時のアプシスの位置に無地のアプシスが復元されていたが、現在は、より奥行き深いバロック期のアプシスが聖堂の時代変遷を伝えるものとして見えるようになっている。